
妖精プロッコリー

メイコ&ゆうなっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精ブロッゴリー

【ISBN】

29694X

【作者名】

マイコ&ゆうなつち

【あらすじ】

野菜嫌いな男の子ジョニーと、野菜大好きな女の子ルーシーと、妖精ブロッゴリーの物語です。

第1話 ルーシーの絶交宣言！（前書き）

中二女子一人で作った小説です。

第1話 ルーシーの絶交宣言！

むかしむかしあるところにて、ジョニーといふ男の子がいました。ジョニーは、野菜が嫌いです。幼馴染の女の子ルーシーは野菜大好き。ある日の学校の帰り、ルーシーはうきうき顔でこう言つ。 「ねえ、ジョニー。今度の土曜日野菜摘みに行かない？」 （うわあああ、せっかくのルーシーのお誘いなのに・・・野菜を見るのもいやなんだ。）

「ねえ、野菜摘みよりも魚釣りとかの方が・・・」

そのときルーシーの何かが切れた音がした。

「・・・？ルーシー？」

「ジョニーなんて大嫌い。野菜好きになるまで・・・絶交よー。」
(絶交よー絶交よー絶交よー・・・そ、そんな)

ルーシーは怒つてルーシービームを放ち、走つていつてしまつた。
(こままじやルーシーはmeの他に仲の良いboy friendを作つてしまふ・・・じうじょう。)

「その願い叶えてあげよう」

そこにいたのはブロッコリーだった。

「だ、誰・・・？ていうか願つてないし・・・」

「・・・まあ、君が何かに困つていることは確かだろ？さあその悩みを言つてじらん！」

い、いやその前にあなたは誰？」

「フフフ・・・それを良く聞いてくれたな・・・オレの名は・・・
妖精ブロッコリーだ！」

「へー、my name is ジョニー！君つて妖精のイメージ
と違うね。」

「・・・オレ様は偉大なる妖精。イメージと違つていて何が悪い！」

「急にきたよ！何なの？こいつ・・・。」

（しかも何気に態度もでかくなつてゐし・・・）

第1話 ルーシーの絶交宣言！（後書き）

次回も読んでください。

第2話 プロッパニー弁（前書き）

ルーシーが出てきません。途中モーテルを抜き言葉が出てきません。

第2話 プロッコリー弁

次の日の朝。

「おーいジョニー朝だぞー起きるー」

「んだよ、つせーなー」

ジョニーは不良化してしまった。髪の上りくんは緑、残りの部分は青という不思議な髪色だ。

「ジョニー、オレ達はプロッコリー仲間じゃないかー仲良くしようつじやないかー！」

「髪の色はプロッコリーでもふくらんでねーし

次の日の朝。

「おーいジョニー朝やで起きいイー」

「んだよ、つせーなー・・・てかなんで関西弁？」

「そんなことより、ルーシーに告白して來い」

「いや、ルーシー怒つてるから無理だよ。野菜好きにならなー」と。

「じゃあ、まずプロッコリー食べてみなーちょっと待つてて。」

30分後。

「ジョニー。できたべさー」

「今度は何弁！？」

おそるおそる妖精プロッコリーの声のする方へ向かった。そこには、妖精プロッコリーと得体の知れない縁のものがたくさんテーブルにのつていた。

「なにこれ？きもい」

「プロッコリー料理だべさ。おこしいから食べてみんしゃい。」

「嫌だよ、氣色つ

「たべらつしゃい」

妖精プロッコリーは無理やり口にプロッコリーの料理を入れた。

「モゴモゴ・・・今度モゴモゴ何弁モゴモゴへー」

「プロッコリー弁」

「モゴモゴ・・・嘘モゴモゴだモゴモゴの・・・ていうがまつずー」

「まあまあルーシーに好かれるためなんだから・・・もつと食え」

また無理矢理口の中に入れた。

「モゴモゴまづいモゴモゴ」

「なんで? こんなにおいしいのに。」

妖精ブロッコリーは自分の口に料理を入れた。

「共食い! ?」

第2話 プロッパニー弁（後書き）

モ「抜き言葉使いましたか？」
次話もみてください！

第3話 ルーシーの反省（前書き）

ジローが出てません。

第3話 ルーシーの反省

一方、ルーシーは、反省していた。

「ちょっと言い過ぎちゃったかな・・・。」

（私も少し反省して、肉・魚が食べられるようになろう）

「その努力、私たちが手伝おう、私は猫缶の精だ。」

猫缶の精は猫缶の姿ではなく、猫のような姿だった。

「で、隣にいるのが、魚の精、肉の精だ。」

「つてめ肉の精、ひき肉にしたらうか？」

「あんだとコラ魚の精。てめえは魚ソーセージにしてやるつか？」

「ああ？ てめえはハムにしてやるよ。」

その様子を見ていた、猫缶の精と、ルーシーはポカンとしていた。すると猫缶の精が止めに入つた。

「君たちやめたまえ、子供の前でみつともないじゃないか。自分の歳分かつて行動してよ、もうつ。」

すると肉の精、魚の精の順に言つた。

「五千二百三十歳だ」

「五千三百一十六歳だ」

するとどや顔をした猫缶の精が言つた。

「フフフ、私は一万歳だ。」

すると3人はルーシーの方を見てどや顔をした。ルーシーは切れ気味に言つた。

「何？なんなの？あんたらいい歳してどや顔？」

するとルーシーはルーシービームを放つた。三人ははもつてこういつた。

「危なかつた・・・。殺す気ですか？「ノノヤロー！」

「ゴホン・・・それはおいといて・・・私の努力手伝うつて言つたわね？具体的に何するの？」

「それは、ブロッコリーの妖精に聞いてからじゃないと・・・。」

すると妖精たちは、ブロッコリーの妖精のところへ行ってしまった。

第3話 ルーシーの反省（後書き）

次話もみてください。

第4話 ただのむちやん（前編）

かなり短いです。

第4話　ただのおつかん

妖精ブロッゴニーの所へとんどいつた三妖精は、しばらくなして戻つてきた。

「あいつ、『ブーロブロブロブロー』としか言わねえ。」

「役立たずが武器もつてボコボコ行こうぜ。」

「おおーー。」

そしてまた二妖精は妖精ブロッ パニーの元へと向かった。

「の、妖精ブロッ パニーのブロッ パニー頭がもがれて

ただのおっさんになつたのは眞づまでもない……。

「おまけ」

その後妖精ブロッ パニーがジョニーにいつ眞つた。

「どうしよう・・・。このままじゃ・・・妖精カリフラワーか妖精
おっさんになつてしまつ・・・。」

「いやもうおっさんだろ?・・・てか妖精おっさんとおっさん何が
違つんだよ!」

第4話 ただのおつかん（後編）

おつかんプログラマー！

第5話 ルーシーの感動！（前書き）

面白いよー。

第5話 ルーシーの感動！

妖精ブロッコリー（今は妖精カリフラワー）の頭をもいだ三妖精が戻つて來た。

「ルーシーただいま！」

「お帰り～・・・ってあんた達何してきたの？」

「ルーシーの好きな野菜の収穫。」

と言いながら肉の精は妖精ブロッコリーの葉っぱの部分を差し出した。

「この葉っぱと私達を混ぜて食べればルーシーもきっと肉＆魚嫌い克服できる。」

「でも、そんなことしたらみんなが（私に食べられて）死んじゃう。猫は食べないけど・・・」

「最初に言つただろう？ルーシーの手伝いをするつて。」

「いや、正確には『その努力、私たちが手伝おう』じゃなかつた？」

「そんなことはどうでもいい！さあ調理を始めや。」

「肉の精！魚の精～！」

30分後。

「出来たぞ～」

という猫缶の精の声と共にみんなの元に向かう。

そこには調理された妖精ブロッコリーの葉っぱと、肉の精と、魚の精がいた。

「さあ召し上がれ！」

「で、でも・・・。」

「ジヨニーに告白するんだろ～？早く食べろ～」

（告白するなんて言つてないけど・・・）

「じめん2人とも。絶対に肉と魚好きになる。」

と言いながら、ルーシーは料理を口に運んだ。

「おこしーー！」

・・・という感動（？）な物語とは裏腹にジョニーのところでは死闘が行われていた。

「ぎゃー！妖精おっさんきもい！来んな！」

「ルーシーに告白すんなら早く俺を食え！」

第5話 ルーシーの感動！（後書き）

次話も見てね～！

第6話アロジ「コニーもぶたれることないの！」

ルーシーは急いでジョニーの元に向かった。

（ジョニー、私、肉と魚食べられるよつになつたよー）

その頃、ジョニーは・・・

「うわ～やっぱ食べられない・・・」

「早く食べろよコノヤローー」

「ピンポーン」

と、ルーシーが言つた。

「あ、ルーシーだ！自分で『ピンポーン』なんて言つのはルーシー
しかいない！」

「何！？まだ食べられない？」

「えつ、まだ何も言つてないんだけど・・・まあまだ食べられない
けど」

（ルーシーつて心読めるつけ？）

「ジョニーのバカッ」

するとルーシーはジョニーをぶつた。（2回）

「ぶたれた！ブロッコリーにもぶたれることないの！」

「呼んだかね？」

「呼んでねーよコノヤローー」

「コノヤローじゃねーよコノヤローー早く俺を食べろよコノヤローー」

「やだよ」

「ジョニーのバカッ」

と言ひながらルーシーはルーシービームを放つた。

「私は…肉の精と魚の精の命を犠牲にして肉と魚を食べたのよー」

「ああ、さつき俺の頭をもいだ奴ら？」

「なのに・・・ジョニーは何の努力もしないで・・・」

「いや、それって俺に死ねつて言つてるんですね」

すると、いきなりドアが開いた。

そして三妖精が・・・

「誰か・・・」

「私達を・・・」

「呼んだかい?」

と言つて入つてきた。

そしたらルーシーが感動の涙を流して・・・

「生きていたのね・・・」

と言いながら感動のルーシービームを放つた。

第6話アロシ「コーヒーにもぶたれたことないのにー」(後書き)

次も見てね。

第7話 おーい、みんなでプロッコリーを無視しようぜ！

「肉の精、魚の精・・・・？」

「ていうか君たちの事呼んだ人なんていねーよ、今必要なのはこの俺、妖精^{おっさん}プロッコリーだ！」

「いやお前も必要ないし

「『なんで自分のことを妖精^{おっさん}って呼んでんだよ』ってツッコンでほしかつた！」

「やあ、ルーシー。久しぶりだね『無視すんな！（ｂｙ妖プロ』肉と魚は好きになつたかい？」

「え、ええ。でもそんなころより何で生きていたの？」

「いや、生きていたも何も、私たちは『死ぬ』なんていつてないぞ？」

「あ、あら・・・・そうだつたかしら」

「まあ、死なずに済んだんだからワケはズーでもいいじゃん」

「おお、この小説の主人公ジョニーくん、ルーシーに主人公取られかけてるぞ・・・・」

「テメーが目立つことしねーからだろコノヤロー」

「だ・か・ら、俺を食えつて言ってんだろうが『コノヤロー』

「ジョニーとプロッコリーのバカッ」

と、またルーシーがジョニーをぶつた。今回は妖精プロッコリーにもびんたした。

「あんたら・・・・まだ分かんないの！？自分の嫌いなものを克服することで友情が生まれるのよ！」

「いやそれはジョニーだけに言えよ。俺関係ないじゃん

「・・・・調理だ」」

と、後方から三妖精の声が聞こえてきた。

「ジョニーの好きな俺様 肉と」

「俺・魚と」

「ジョニーの嫌いな野菜を混ぜて食べやすくなるんだーお前の役目はそれだ！」

「・・・・・ああ。」

第7話 もーい、みんなでアロシ ハローを無視しちゃう! (後編)

まだまだ続くよ?

第8話 おい、今度はブロッキーが三妖精の意見無視したぞ！（前書き）

H A H A H A H A H A H A H A H A !

第8話 おい、今度はプロッコリーが三妖精の意見無視したぞ！

（前に俺が作ったプロッコリー料理は不評だつたんだよな。もつとたくさん肉と魚を加えて色と味をなくそう・・・・ていうか、俺つて嫌われ者だな味も悪いし、形もきもい。色も最低。妖精界で『付き合いたい妖精ランキング』最下位だつたし。やっぱり肉とか魚とか加えないと食べてもらえないのか・・・・ん？までよ、確か・・・）

「おーい、おっさんプロッコリー、まだか？」

「おっさんプロッコリーって言つたな！俺は一回妖精界に行つて来る。

「え？」

「まつてろよ、ジョニー。帰つてきたら、すっげーうまいプロッコリー料理食わせてやるからな！」

そのころ、三妖精とルーシーは縄跳びで遊んでいた。

「妖精プロッコリーのプロッコリー、食べてあげましょー」「、21」「31」・・・

第8話　　おい、今度はプロッパーが三妖精の意見無視したやー！（後書き）

まだまだ見てくれるよね？

第9話 美女の妖精（前書き）

HE HE HE HE HE !

第9話 美女の妖精

妖精界にて、妖精ブロッコリーは王女と会っていた。その王女といふのも妖精で、美人の妖精だ。

「ふふふふふふふふふふ、いまさら何の用かしら」
実は、妖精ブロッコリーは王女の部下だつた。でもあまりにも役立たずなので、リストラされてしまったのだ。

「お前の・・・育ててている・・・甘いブロッコリーを俺にくれ」
「誰がテメーなんかに渡すかしら」

「急に口悪くなつたー」

「じゃいいわつ。交換条件として、君ノ命ヲイタダクワ」

「命つてええーー！つてなんでいきなり日本語苦手な外国人風なしゃべり方！？」

「ワレワ、ウチュウ人ノ頂点ニ立ッテイル者。」

「いや何でいきなりそんな展開！？」

「命ト甘イブロッコリー両方欲シカツタラ、ワレヲ倒スガイイ！」
「てかもうこれ何の小説だよ・・・」

第9話 美女の妖精（後書き）

次回プロットコリーはぜひもう行動をするか・・・
考えてみなされ！

第10話

カナリウマプロシマー（前書き）

HA HA HA HA HA

第10話 カナリウマブロッサー

（くそ、甘いブロッサーをGetするにはこいつを倒さなければ。
・・）

「フフフフフフフフ、今ノオ前デハワレヲ倒スコトハデキン！」

「私たちがいるわ！」

「ナニ！？」

「ジョ、ジョニー、ルーシー、猫缶、肉、魚！」

「俺達も加勢する。一人で手柄をあげようとすんなコノヤロー！」

皆で飛びかかった瞬間妖精ブロッサーのブロッサーが突然光出した。

「ナンダト三千百十五年ニ一度出ルトイウマ、マ、幻ノ『カナリウマブロッサー』ガコイツノ頭ニ・・・。
「ち・・・力がみなぎつてくるワアアアア！」

次見てね

第11話 24時間クッキング（前書き）

HE HE HE HE HE

第11話 24時間クッキング

「このブロッコリーを食べると野菜好きになれる気がする。」

「アタリマエダ幻ノブロッコリーナンダカラ」

「じゃあさつそく調理しよう。」

「ワレヲ無視スルダト！？…ウツ…」

「どうした王女」

「ウ…ワレハ、ガンデ余命1ヶ月ダッタンダ。ソレヲ1ヶ月前ノ三時間前ニ宣告サレタ…」

「てことはあと三時間の命」

「ていうか忘れてたのかよ」

「フフフ…王女、心配するな、お前が死んだらお前も具としてジョニーの料理に入れてやる。」

「ナンダト？ナンカ爆発シソウ…ウアアアアー。」

王女は宇宙のちりとなり消えていった。

「あーあ、具入れられなくなっちゃった。ジョニー、残念だつたな」

「いや食いたくねーし」

「まあいい。帰つて調理しよう」

そして皆はジョニー家に帰つていった。

「妖精ブロッコリーの24時間クッキング」

「長！」

「ていうことだから、ルーシーと三妖精は一回帰つていいぞ。」

「はいはい。」

そして三妖精とルーシーが帰つてから十分後一人の顔がにやけた。

「作戦…」

「…成功。」

二人は王女がちりになるちょっと前にある作戦を立てていたのだ。作戦というのは、幻のブロッコリーは、三妖精とルーシーには食べさせないようにして一人だけで食べてしまおうというものだ。なの

で24時間クッキング というのは嘘で実は十分でできる簡単な料理なのだ。

そして十分後。

「できたぞ。俺の頭をもいで作ったサラダだ！」

「もいで盛りつけただけなんになんでそんな時間かかるの？」

「そんなことはどうでもいい！早く食べてみろ！」

「・・・・」

次話も見て！

第1-2話ジョニーの精とバカブロ王

「さあ早く食べろ!」

「・・・やつぱり無理。食べたくないよ・・・」

「ジョニーのバカツ」

「なぜルーシー化!?」

「・・・食え。」

ブロッコリーを無理矢理口に入れられたジョニー。

最初らへんと同じ展開!?!いや違う。

ジョニーは笑顔だ。

「とてもおいしい!」

「アタリマエダ『スゴクウマブロッコリー』ダカラナ
「王文化!?」

2人は幻のブロッコリーを食らい尽くしてしまった。
そして次の日、ルーシーと三妖精がやってきた。

「何!?もう食べた!?!?」

「ジョニーのバカツ」

「全てはジョニーの精だいやジョニーの所為だ。」

「「「ジョニーのバカヤロー!」」」

「いや、漢字を間違えたお前らがバカだ」

うつうつうつ・・・

どこからか誰かの泣き声が聞こえてきた。

「何、泣いてんだ。ブロッコリー」

「俺は、ジョニーに野菜を好きになつてもらひつ為に来た。そして、
ジョニーは好きになつた。だろ?」

「う、うん・・・」

「指名を果たした俺はたつた今妖精界から『王女2代目になつてほしい』って電話來たんだ・・・」

「妖精ブロッコリーが王女になるの!?!お前女!?!?」

「いや違つけど。とにかく……俺は……妖精界に……戾らな
きや……もつ……ジョニーとは……会えない……」

「俺、三妖精は下つぱなので自由なのでーす」

「なら王女、じゃなかつた王様になつて、『王様は自由令』出せば
？」

ルーシーは実はかなり頭がよくオール5なんて当たり前。

なので今のような発想はお茶の子さいなのだ。

「頭いいな……」

「ちなみに余談だがジョニーはルーシーの逆、ここまで言えれば分か
るよね？」

「てめえ猫缶の精、何ナレーターみたいな事言つてんだよ。しかも
何で俺の成績の悪さ知つてるのー？」

ジョニーは成績を親にも見せないのだ。

なので成績を知つてているのは先生だけなのだ。

だから猫缶に成績を知られて、内心びっくりしそぎてているのだ。

「ははは、手品師は客に種明かしをしてはいけないから教えられな
いなあ」

「手品で俺の成績が分かるわけないだろーが。」

「でもさあ、これじやあルーシーと釣り合わないんじやね？」

妖精ブロッコリー、次期の王が言つた。

すると、ルーシーは顔を赤らめて、

「え、ジョニー、私のこと、好きだつたの？」

「！」

ついに、長年の秘密が、バカブロ王によつて解禁されてしまつた。

「う・・・う・・・ブロッコリーのバカアアーーー！」

ジョニーは走つて家を出でていつてしまつた。

「・・・ルーシー。お前の考えた『自由令』は出来ねえ。俺がこの
ままここに居れば、ずっとジョニーは甘えたままだ。」

「いやそれお前が言つたから傷ついたんだろ。」

「俺、ジョニーを追いかけてくる！」

第13話 バカプロ王にプロはなる？

沃清ブロコツリーはジヨ二ニ「捕獲」成功ノ事。

「ぬおつブロッコリー」と机に捕まつた。つてかブロッコリーなのに風の姫くはやー。」

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

「… もいい處でないのに、ななな井戸い

卷之三

「スル」スル「スル」

訳・うおー? 「おひ」しか言えなくなつたー!

「だからついに待つな」つ

卷之三

訳・何う！誰がバカブロ王だ！つか、クソ政権つて

「しし加洞黒れ 早く離せ！ もう俺たちは 友達しやなし！」

卷之三

すると3妖怪とルーニーがおひついた。

「な、なんだかブロッコリーお前、神の領域内で使われる『うお語』

使えるように!? でも人間界の言葉が使えなくなつて……トシ

卷之三

」の「」の「」

訳・分かつた、がんばる！

「…か帰らないのかよ…」

「いや、お端」 しゃあ誰も通しないたゞ

「うお、うお、うおうおうおー。」

訳・だから、もう少し世話をなる。

「え？ なんてこいつるんだ？」

「うお・・・うおうおうおうお。うおうおうおー。」

訳・あの・・・うきはバーレーメン。この機会に生田あれば、

「だからなとて直ってんだよーアハハ」

（うお・・・うおうおうおうおー）

訳・ジヨーー、許してくれるかな？

「必ずテメーにさつめの仕返しをこなせんから覚悟しなー。このうお

ブロHー。」

「うおうおうおー。うおうおうおー。」

訳・かんちがいしないでー！ かなづ必ず人語使えるようになるからね！

ルーシーはふと疑問に思つたことを口に出した。

妖精語もあるの?」

卷之三

106

レーベル

「たるみ」

二二

「最後のやつこそ

「アーフ、アーフ、アーフ！」

「いや、妖精語だよ。」

「今のが妖精語？」

「うん。妖精語は俺らザコの領域内で使われるんだ。」

卷之三

お龍神をつかねる者に力説せかん。くじけらる『天晴うら話』をいぢる。バツ二二九。

九月九日憶山東兄

突然、
妖精ブロッコリーの頭が光つた。

「ま・・・また『カナリウマブロッゴリー』に・・・?」

「いや違う！プロモーターの頭はダイヤモンド並みに光ってる

!

「アキラアキラアキラ...」

「おお、なんだよアロッサ、アーリー！」

第15話 ブロッコリーの上にも3年

「妖精ブロッコリーが突然倒れてしまった。」

「ブロッコリー、ブロッコリー！」

「ジョニーが何度も呼びかけても返事がない。」

「死ぬなよブロッコリー……せつかく友達になれたのに……立て！立つて妖精界の王になれ！」

しーん・・・

「う・・・う・・・あの時・・・俺とお別れになっちゃうって時・・・

・泣いてくれてありがとな・・・うつ・・・

「返事がないくらいで死んだと思つてんじゃねーよ」

「え？ ブロッコリー？」

「俺はそんなにヤフーじゃない。・・・といつても立ちくらみして倒れたんだけどな」

「ブロッコリーのバカヤロー！ バカブロ王！」

「バカブロ王言うな！」

「あれ？ そいえば妖精ブロッコリー、『妖精うお語』じゃなくなつてるよ？」

しーん・・・

「え、あたし変な事言つた？」

「・・・本当だ！ やつたー！ 妖精うお語使えたのは嬉しいけどやつぱジョニーと話せなきゃ嫌だもんな！」

「・・・」

「そういうや、さつき俺が倒れた時に『友達』って言つてくれたよな？ ・・・つてどうしたジョニー？」

「だ・・・だつて・・・ブロッコリー・・・人語使えるようになつたから・・・妖精界に戻つて・・・しまつんだる？」

「アハハそうだなー」

「もう会えないんだろ・・・そう思つたら・・・悲しくなつてきて・・・

・・

「バー力

悲しいのは、お前だけじゃねーよ。俺も、ジョニーと別れるの、す
ごい悲しい・・・でも・・・ジョニーが俺の事『友達』って言って
くれただろ？俺はその言葉がとても嬉しかった。こんな俺でも俺を
必要としてくれる人がいるって思つて。」

「・・・それ、どういう意味？」

「俺、実はな・・・」

第1-6話「プロッコリーの過去

「俺、実はな…

「昔、プロッコリーだつたんだ。」

「いや今も、プロッコリーだろうが

「いや…ジョニー・ヤルーシー達が食べるようなプロッコリーだよ。俺は秋田県の橋本農家でできたプロッコリーだつた。そして、出荷されてスーパーに売られたんだ。でも…。
『形が悪い』と、誰も買つてくれなかつた…。値下げされた値段でやつと買つてもらえたんだ。」

「それで食べられて妖精界に行つたとか？」

「いや、違う…。つていうか、もう話すの面倒だから回想行きます」

「ここまで話しどいて回想かよ…。」

妖精、プロッコリーは、値下げされた値段（50円）で佐久間さん家に買われた。

佐久間さん家の息子・麗一くんはジョニーと同じく野菜が大嫌いだった。

「麗一！プロッコリー買つてきたわよ

「え？！？何で！？」

「野菜食べないと大きくなれないわよ。」

「別にいいもん、大きくなれなくたつて。」

と、言いつつ毎日牛乳をがぶ飲みする麗一くん。

妖精、プロッコリーは麗一くんに食べてもらえるのか…。?

「最後の牛乳の余談、本編と関係ないよね！？」

第17話 プロツコリーより人参派

「今日はハンバーグよ」「わーい！」

佐久間さん家は今日はハンバーグ。

妖精プロツコリーと人参添え。

「ねえ、お母さん！プロツコリーと人参食べなくていい？」

「ダメよ！ちゃんと食べなさい！」

「つたく、この麗ーつて子嫌だわ。」

いきなり隣の人参が話し出した。

「それ、どういう意味？」

「私、3日前からここにいるんだけど・・・」の子、野菜を食べないのよ。」

「だから、私達も食べてもられないかもしねないわね・・・」

と、その時・・・

「じゃあ、人参だけ食べるよ！プロツコリーは残していい？」

そう言いながら、麗ーくんは人参を箸でつまんだ。

「嘘・・・私・・・食べてもられるの？やつたー じゃあ、またねプロツコリーさん。」

「あ、待って・・・」

「じゃあ、プロツコリーは捨てちゃいましょう、安かつたし。」

「え、え、捨てられちゃうの！？どうして？どうして？どうしてなんだ・・・」

回想終了

「気がついたら、俺は妖精界にいたわけだ。」「ふーん。それが？」

「ジョニーが聞いてきたんだろ？が！」

「いや、俺はプロツコリーの過去を聞いてんじゃなくて、プロツコ

リーが言つてた『友達』がビートル一たらつてことを聞こてんだよ。』

「・・・つまり、俺らは離れても切れない絆で結ばれてるってことだよ！』

「その『?』は何ですかア！？』

第1-8話 国民の「クロウ ハリー」騒動

「ね、ねえ。2人で話してないで私達も混ぜてよ。」

「おーいいぞ（「ゴーン・・・ゴーン・・・」）

「何この鐘の音。」

「いや、携帯の着信音。ちょっと失礼。あーもしもし？」

「ブロッ ハリー の携帯つてブロッ ハリー型・・・（笑）」

「そういえば、ブロッ ハリー の話に出てきた『麗一くん』つてまさか・・・」

「え！？今すぐ妖精界の王になれだと…？」

「声でけえよ・・・」

「あ、ああ分かった。一回切るぞ。・・・悪い、今すぐ妖精界に行くことになった。ここでお別れだ。」

「ええ！？」

「何でそんな急に・・・」

「国民が何かと騒動を起こしているらしい・・・ハジマニーハビうした？」

「あれ？さつきまでここにいたよね。」

（俺の記憶が正しければ・・・）

レイイイチくんは
野菜が嫌い。

第1-9話イッシュドミノ

レイイチくん。

日本からやつてきた子。

野菜が大嫌い。

だから意気投合した。

「大根クソまずいよな！」

「あー、分かる！俺トマトも嫌い！」

レイイチくん・・・

お前は・・・

「ブロッコリーヲ捨テタ人デスカ？」

ジョニーは『佐久間』という表札を見つけてインター ホンを押した。

「ハロー、つてジョニー！どうした？」

「レイイチくん・・・お前に会わせたい人（会わせたいブロッコリ

ー）がいるんだけど・・・」

「それなら行くよ。ちょっと待つてて。」

しばらくするとレイイチくんが出てきた。

「走るぞ！」

「ちょ・・・待つてまだ靴ひもが・・・」

ジョニーはレイイチくんの靴ひもを踏んで、レイイチくんが転んでジョニーも転んでドミノ倒しのようになってしまった。

そこに通りかかった人が。

「オー！イッシュドミノ！」

「ティクピクチャー！」

「無視しよう。早くしないとブロッコリーが・・・」

「ブロッコリー？どういうこと？」

「ブロッコリー！ルーシー！三妖精！」

「あ、ジョニーどこ行って・・・お、お前は・・・」

最終話妖精ブロッコリーよ永久に

「お、お前は……」

(やつぱり……レイイチくんは……)

「き~も~。何このブロッコリー」

「……へ?」

「足とかついてきもいんですけ~。これは夢?」

パンツ

「バカヤロー!」

「な、何すんだよジョー。だつてきもいだろ!」

「確かにこいは……ブロッコリーはきもいよ!でも……こいつは俺を助けてくれた……野菜嫌いも克服できた……俺は……いつのことを『親友』だと思つてる!」

「ジョー……」

「レイイチくんは昔ブロッコリーを捨てちやつたんだ!覚えてないだろうけど。レイイチくんには捨てられた野菜達の気持ちなんて分からぬだろ!」

「俺が……野菜を……捨て……つづ……」

「どうした」

「俺……日本にいたときはそんなこと気にせず捨ててた……でも、俺は捨てられていく野菜達が可哀想で……野菜は嫌いでもちゃんと残さず食べるよつにしてるんだ……」

「そうだつたのか!俺……何にも知らなくて。」

「ごめん……野菜達……」

「あのー、感動モノみたいな猿芝居やつてる人達。俺そろそろ行かないと。」

「芝居じやねーし!」

「行くつて?」

「あ、妖精ブロッコリーは妖精界の王になるから妖精界に行くんだ

つて。」「

「もう二つちには来ないのか？」

「ああ。」「

「まあまあ、たまに二つちから会いに

「行けば」

「いいじやん！」

「そうか。その時は、俺も一緒に行つていいか？」

「もち。」

「じゃあ、行くわ。またな。ジョニー、ルーシー、三妖精、麗一。」

「アアアアア・・・

「消えた・・・？」

「行つちやつたか。」

「そういえばさー、ジョニー、ルーシーのこと好（わー！）黙れ！b
yジョニー」

「うん。知らなかつたよ。私みたいなベジタリアンを好きになつてくれる人がいたなんてさ。」

「あーあーあーあー」

「でも、ジョニーが私のこと好きつて聞いて嬉しかつた。ジョニー
が好きだから。」

「あーあーあー・・・つてえー！？」

「なーんだ両想いかつまんねー」

「つまんないつて何だよ！」

「まーまー、この話はハツペーHONDで終わらせてよ。」

「・・・分かつたよ」

ブロッコリー！元氣か？

俺達両想いだぜ イエイ

んなわけで楽しくやつてるんだよな～

・・・・・・・・・・・・・・
俺達『親友』だからな！
「つたくいちいち手紙送んなよ」
「バカブロ王様国民が暴れ出しています」
「バカブロ王言つな！国民の名前は・・・『妖怪カリフラワー』？」

妖怪カリフラワーに続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9694x/>

妖精ブロッコリー

2011年11月24日19時00分発行